「ダイオウタソウムシ」―自分を知らない禍

ソウムシ科

危険度：★★★★★

生息数：★★☆☆☆

生態

ダイオウタソウムシはソウムシ科の中でも最大の大きさを持つ種であり、成長すると人間の頭部ほどの大きさになる。憑いた人間の頭に乗るように憑き、左右に開く顎を使って頭部から感覚を摂取する。体表に憑くソウムシ科としては珍しく口吻を備えておらず、頭に噛り付くようにして摂取行動をとる。この禍が摂取するのは「他者」の感覚である。乳児期の人間にしか憑かず、憑く条件も特殊なため個体数は少ないが、その分憑いてしまえば最も対処の難しい禍の一つとして知られている。シュイロシュソウムシとは摂取する感覚が近く、競合関係にある。ダイオウタソウムシとシュイロシュソウムシの両方が同じ人間に憑いたという例は報告がない。

解説

他者という感覚は人間の持つ感覚の中でも最も大切なものの一つである。人間は自分以外の人間や生き物を考えるときに自分と相手を重ねてから想像するという過程をとるが、それは後天的に学習することによって得られる能力である。その学習は人間が言葉を覚えるのと同じように自然に始まるもので、狭義の教育では「教える」ことさえできない範囲のものである。この学習はまず「母親」を認識し、それから母親の相手である「自分」、そしてそのどちらでもない「他者」という段階で認識を広げるという方法で学習される。ダイオウタソウムシはこの「他者」の感覚を摂取し、完全に失わせるのである。シュイロシュソウムシに憑かれた人間も最終的には「他者」の感覚を失うことになるが、それが「麻痺」であるのに対し、ダイオウタソウムシは成長の阻害による「喪失」である。それらへの対処の方法や難易度は大きく違っている。またダイオウタソウムシに憑かれた人間は「他者」の喪失により「自分」という認識が完成しなくなる。人間は「他者」と「自分」を比較することにより、そもそも「自分とは何なのか？」という疑問へたどり着き、その疑問からの思慮で「生きる意味」や「アイデンティティ」を発見するのである。それが「自分」という認識を完成させるために必要な要素になるのだ。

対処法

この禍は乳児期の人間にしか憑かない。これは「母親」という認識が形成される時期と一致しており、ダイオウタソウムシに憑かれるかどうかはこの認識の完成度に大きく影響されることが分かっている。「母親」という認識が上手く形成できなかった人間がこの禍に憑かれやすいのだ。つまりこの禍への対処法は「母親」という認識を正しく成長させることになる。

「母親」という認識は「他者」とは大きく違う。母親は絶対に「敵」ではないという前提を持つからである。人間は元々「他者」への「敵かも知れないという恐怖」を持っている。しかしその「敵」という感覚を正しく理解するためには「味方」という感覚が必要であり、それを最初に与えられるのが「母親」なのである。「味方」が分からなければ「敵」も正しく理解できず、本能的に感じる恐怖のみが認識を狂わせ、「敵（他者）」の本当の姿を見えなくするのだ。

具体的な対処法を簡単に言えば、母親が乳児の「敵」でなく「味方」であることである。もっと簡単に言えば、母親が自分の子供を「味方」だと常に思い続けることである。